

中学校女性体育教員のダンスに対する抵抗感と羞恥心について

酒向 治子 ・ 永田麻里子* ・ 猪崎 弥生**

Keywords : ダンス, 抵抗感, 羞恥心

1. はじめに

これまで日本の体育教育の中でダンスは敬遠されがちな領域であり, その大きな原因の一つとして指導者である教員のダンスに対する抵抗感が指摘されてきた¹⁾。2012年度に中学校におけるダンスの男女必修化という大きな転換点をむかえた今, ダンス授業を行ったことのない教員をどのようにサポートしていくか, いわゆる教師教育の問題が大きく浮上している²⁾。そして実のある教師教育の方法を探究する上で土台となるのが, 現場の教員がダンスに対して抱く意識の詳細な検討であろう³⁾。

筆者らはこれまで, 教員と中学生の両方を対象としてジェンダー・イメージ(「ダンス=女性的」という根強いジェンダー・バイアス)⁴⁾とダンスへの抵抗感についての継続的な調査を行ってきた。2012年に行った調査(酒向, 2013)では, 教員と中学生の双方とも男女を問わずダンスについて抵抗感を持っているという結果を導き出した。しかしその一方で, 教員は男性, 中学生は男女ともに「男らしい/女らしい」というジェンダー・イメージと抵抗感には相関が見られず, ジェンダー・イメージと抵抗感の間隔は大きい可能性が示唆された。このことにより, ジェンダー・バイアス以外の視点からダンスの抵抗感の発生因の検討を行う必要があることが浮き彫りとなった。

教員の側に焦点を絞ると, これまで男女問わずダンス指導に対する抵抗感の主要な要因の一つとして, 「恥ずかしいと構えてしまって, 何となく敷居

が高いように感じる」(渡辺, 2009)というような, 教員自身の羞恥心(「恥ずかしさ」や「恥」以下, 本稿では「羞恥心」とする)の問題は繰り返し言及されてきた。しかし, 「抵抗感」と「羞恥心」の関係について掘り下げた学術研究は非常に限られているのが現状であり⁵⁾, 教員を対象にしたまとまった論考は見当たらない。

2. 目的

本研究では, 現役中学校教員を対象に質問紙調査を行い, ダンス指導への抵抗感の実態を探り, 特に羞恥心との関係に焦点をあてて考察を行うことを目的とする。

3. 方法

実施日 2013年8月19日

対象者 岡山県の中学校体育教員を対象としたダンス指導者講習会に参加した教員のうち, 回答が得られた20代から50代の女性計36名。各年代とダンス指導経験歴の内訳を表1に示す。

調査項目 1. 年代を聞く項目, 2. 性別を聞く項目, 3. 教員歴を聞く項目, 4. ダンス指導経験年数を聞く項目, 5. 教員養成機関において, ダンス実技を履修した経験があるか否かについて聞く項目, 6. ダンス指導をすることへの抵抗感について聞く項目, 7. ダンスをすることへの羞恥心について聞く項目, 8. 羞恥心のある人に対し, その内容について詳細に聞く項目の合計8項目。今

岡山大学大学院教育学研究科 生活・健康スポーツ学系 保健体育講座 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

* お茶の水女子大学 112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

** お茶の水女子大学 112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

Junior High School Female Teachers' Negative Feelings and Embarrassment toward Dance

Haruko SAKO, Mariko NAGATA, and Yayoi IZAKI

Physical Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Ochanomizu University, 2-1-2 Otsuka Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610

** Ochanomizu University, 2-1-2 Otsuka Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610

表1 回答者の年代とダンス指導経験歴

	1～9年	10～19年	20～29年	30年以上	合計
20～29歳	9(25.0%)	—	—	—	9(25.0%)
30～39歳	4(11.1%)	7(19.4%)	—	—	11(30.6%)
40～49歳	1(2.8%)	3(8.3%)	6(16.7%)	—	10(27.8%)
50～59歳	—	1(2.8%)	4(11.1%)	1(2.8%)	6(16.7%)
	14(38.9%)	11(30.6%)	10(27.8%)	1(2.8%)	36(100%)

回の分析では、1. 2. 3. 4. 6. 7. 8. の項目のみ用いる。

8の羞恥心のある人に対して内容を聞く項目であるが、本稿では恥の感情的多様性についての菅原(1992)の4つのカテゴリーに依拠し⁶⁾、「人に見られることに緊張を感じる」(対人場面での緊張感)、「人に見られることに照れを感じる」(軽いはじらいの感覚)、「自分自身に戸惑いを感じる」(不快の程度が強い恥辱の感覚)、「人と踊るときにどのようにふるまってよいか困惑する」(対人的な困惑感)の4つを選択肢とした。

手続き 講習会前に質問紙を被験者に配布し、研究の趣旨を説明した上で回答を求めた。

調査票への記名は求めている。また、調査票の冒頭、回答および結果は研究に利用するのみで、他の目的に使用しないこと、回答結果はすべて統計的に処理しプライバシーが漏れることはないことを明記した。

4. 結果と考察

4-1. ダンスを指導することに対する抵抗感

(1) 平均値

ダンスを指導することについて「抵抗はない」1点、「どちらかといえば抵抗はない」2点、「どちらかといえば抵抗がある」3点、「抵抗がある」4点とし、平均値を算出したところ2.50(SD=.941)であった。平均値をもとに推定すれば、どちらともいえない状況にあると言える。これを踏まえ、各回答項目

の度数を算出し、図1に各々が全体に占める割合をグラフ化した。これより、どちらかといえば抵抗がある回答者が47.2%であり、全体のおよそ半数を占めていることがわかる。加えて、抵抗がある回答者11.1%を合わせると、全体の58.3%は抵抗を持っていることがわかる。

(2) 教員年齢との関係

ダンスを指導することに対する抵抗感と教員年齢とで一元配置分散分析を行ったところ、いずれの年齢層においても有意な差は認められなかった。

(3) ダンス指導歴との関係

ダンスを指導することに対する抵抗感とダンス指導歴とで一元配置分散分析を行ったところ、いずれの年齢層においても有意な差は認められなかった。

4-2. ダンスをすることに対する羞恥心

(1) 平均値

ダンスをすることに対する羞恥心について「羞恥心(恥ずかしさ)を感じない」1点、「どちらかといえば羞恥心(恥ずかしさ)を感じない」2点、「どちらかといえば羞恥心(恥ずかしさ)を感じる」3点、「羞恥心(恥ずかしさ)を感じる」4点とし、平均値を算出したところ2.39(SD=.871)であった。平均値をもとに推定すれば、どちらかといえば羞恥心(恥ずかしさ)を感じていないと言える。これを踏まえ、各回答項目の度数を算出し、図2に各々が全体に占

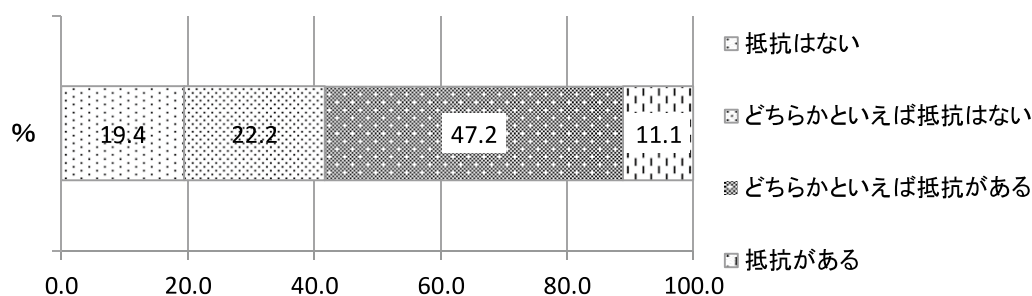


図1 ダンスに対する抵抗感について

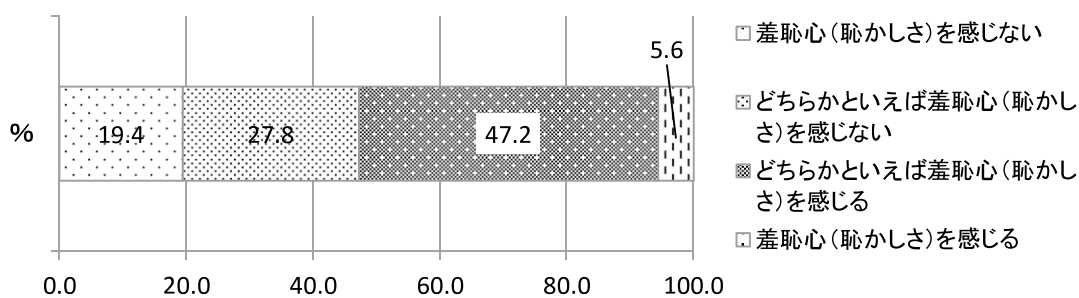


図2 ダンスに対する羞恥心について

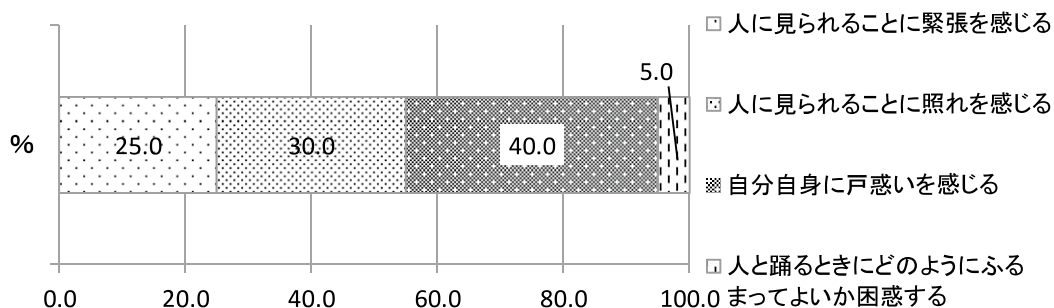


図3 ダンスに対する羞恥心の内容

める割合をグラフ化した。これより、どちらかといえば羞恥心(恥ずかしさ)を感じる回答者が47.2%であり、全体のおよそ半数を占めている。加えて、羞恥心(恥ずかしさ)を感じる回答者5.6%を合わせると、全体の52.8%は羞恥心を感じていることがわかる。

(2) 教員年齢との関係

ダンスをすることに対する羞恥心と教員年齢とで一元配置分散分析を行ったところ、いずれの年齢層においても有意な差は認められなかった。

(3) ダンス指導歴との関係

ダンスをすることに対する羞恥心とダンス指導歴とで一元配置分散分析を行ったところ、いずれの年齢層においても有意な差は認められなかった。

(4) 羞恥心の感情状態について

「どちらかといえば羞恥心(恥ずかしさ)を感じる」あるいは「羞恥心(恥ずかしさ)を感じる」と回答した20名にのみ、羞恥心(恥ずかしさ)の内容について回答を求めた。図3に結果を示す。これより、「自分自身に戸惑いを感じる」が全体の40.0%を占めていることがわかる。

4-3. ダンスに対する抵抗感と羞恥心との関係

ダンスに対する抵抗感と羞恥心との関係について調べたところ、正の相関が認められた ($r = .697, p < .001$)。すなわち、抵抗を感じている人ほど羞恥

心を持っていると言える。

5. 討議

ダンスへの抵抗感については、平均値で推定すれば、どちらともいえない状況にあり、教員年齢やダンス指導歴と抵抗感の有無には関連性は見られなかった。全体に占める割合(%)で抵抗感を見ると、全体の58.3%は抵抗を持っている。2012年に行った調査(酒向, 2013)では同様の質問項目に対して男女ともに「どちらかといえば抵抗感を持っている」という結果が出ている。今回の結果と総合して考えると、教員は明確に「抵抗感がある」とはいえないものの、やはり根強い抵抗感を抱える傾向にあるといってもよいのではないかと。

羞恥心については、平均値をもとに推定すれば、どちらかといえば羞恥心(恥ずかしさ)は感じないものの、羞恥心を全体に占める割合(%)で見ると、「どちらかといえば感じる」人の方が多いことが明らかとなった。教員年齢やダンス指導歴と羞恥心の有無は関連性が見られなかった。羞恥心がある人がその感情として、「人に見られることに緊張を感じる」(対人場面での緊張感)25%、「人に見られることに照れを感じる」(軽いはじらいの感覚)30%、「自分自身に戸惑いを感じる」(不快の程度が強い恥辱の感覚)40%、「人と踊るときにどのようにふるまってもよいか困惑する」(対人的な困惑感)5%と、自分自身への戸惑いへの割合が一番高くなっているものの突出しているとはいえ、羞恥心と一言でいってもそれが表す感情状態は多様性をもっていること

がわかる。また、抵抗感と羞恥心は正の相関が見られたことから、「ダンスに抵抗感を感じている人ほど羞恥心がある」ということを導くことが出来た。これは、羞恥心をダンスへの抵抗感を生み出す一要因として学術的に位置づけられたところに意味があるだろう。

今後、ダンスへの抵抗感に深く関わる羞恥心の発生状況や発生要因についてより深く検討していくためには、羞恥心に関する心理学や社会心理学領域の知見をさらに取り入れていく必要がある。また本調査では男性教員の回答者が十分に得られなかったことから、女性教員に限定した意識調査となった。従って男性教員を含めた、より規模の大きい追調査も今後の重要な課題となるだろう。

〔付記〕

本研究は、科研費(22310160)および科研費(24700623)の助成を受けたものである。また、本調査に際し、快くご協力を賜りました岡山県中体連ダンス部夏季講習会に参加されました諸先生方のご厚意に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 表現運動・ダンスに対する教員の抵抗感については数十年にわたり断続的に報告されている。森・阿部・梶原・メ木(1981)が小学校教員を対象に行った意識調査では、体操・器械運動・陸上運動・ボール運動・水泳・表現運動の中で一番「指導しにくい」という結果を報告している。また、安藤・岡田(2003)が徳島県の小学校教員を対象に行った意識調査では、「体育の中でダンスを重視する」と回答した教員は1割もおらず、指導力への不安からダンスを避ける傾向が多いことが明らかとなった。
- 2) 中村(2009)が東京都公立中学校教員を対象に行った意識調査によると、ダンスへの生徒の適性に対する懸念より、「教員の指導力不足への不安の方が授業実施にあたって直面する大きな問題点」とし、教員の指導力不安をなくすための支援体制の必要性を提起している。
- 3) 寺山(2007)は小学校教員を対象に、表現運動の指導の困難性に焦点をあてて「何をつまづいているのか」をより詳細に考察している。
- 4) ダンスに関する「男らしい・女らしい」というジェンダー・イメージについては、30年前の1980年と現在では語られ方に変化が生じているものの、「ダンス＝女性」という見方は根強い。本稿の目的からはずれるためにこのジェン

ダー・イメージの研究史的な変遷についての詳細には触れないが、1980年代初頭には「ダンス」は「女性らしさ」と結びつけて語られることが多かった。例えば長谷川・酒井(1981)の調査では、性役割認知についての柏木(1967)の論に依拠し、ダンスはいわゆる「女らしい」者が好んでいることから、「本質的にダンスは『女性らしい』と言えるのかもしれない」と「ダンス＝女性」を本質的なものと捉える見方を示している。体育領域におけるダンスの異質性を論じた岸(1983)も、文武の対比性という観点からスポーツを「武性:男性的」、ダンスを「文性:女性的」と位置づけている。また、1990年代には、石井・武井(1995)(1996)は「ダンス＝女性」というイメージの変容には男女共修のダンス学習が有効であるとしている。

- 5) ダンスにおける羞恥心の問題を取り上げた論文には麻生(1988)が挙げられる。
- 6) 羞恥心の感情的多様性に関する研究は、社会学者の作田(1967)や、社会心理学者の井上(1969)によって始められた。作田による、否定的な自己が他者に露呈されることによる「公恥」と、自分の至らなさ自らを省みることによって生じる「私恥」の分類は、羞恥心の研究の大きな足がかりとなるものであった。現在、菅原や樋口(2009)がさらに発展的な研究を行っている。菅原による4つのカテゴリーでは、対人場面での緊張感は「気おくれする、緊張する、あがる」、軽いはじらいの感覚は「はにかむ、恥らう、照れる」、不快の程度が強い恥辱の感覚は「体裁が悪い、赤っ恥をかく、屈辱的」、対人的な困惑感とは「気まずい、気づまり、きまり悪い」を内容とする。

参考文献

- 麻生和江(1988)表現運動・創作ダンスの学習における「恥ずかしさ」について。大分大学教育学部研究紀要 10.2:331-339.
- 安藤幸・岡田晶子(2003)徳島県における小学校舞踊教育の現状と問題点—1991年と2001年の表現運動指導の比較を通して—。鳴門教育大学実技教育研究 13:53-65.
- 石井千代江・武井正子(1995)高等学校の男女共修のダンス学習に関する研究—体育科教員のダンスイメージを通して—。順天堂大学保健体育紀要 37:9-17.
- 石井千代江・武井正子(1996)男女共修のダンス学習に関する基礎的研究II—男・女学生のダンスに

- 対するイメージの変容を通して一. 日本体育学会大会号861.
- 井上忠司 (1969) 主体の内面的側面から観た恥と罪—その社会心理学的構造—. ソシオロジ, 49: 113-124.
- 柏木恵子 (1967) 青年期における性役割認知. 教育心理学研究 15: 193-203.
- 岸純子 (1983) 教科体育におけるダンスのあり方 I. 体育科におけるダンスの異質性—「文」性, 「武」性の観点から—. 香川大学教育学部研究報告 59: 21-30.
- 作田敬一 (1967) 恥の文化再考 筑摩書房
- 酒向治子・永田麻里子・出原智波・角南順子・猪崎弥生 (2013) 教員と中学生のダンスに対するジェンダー・バイアス. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録 152: 45-49.
- 菅原健介 (1992) 対人不安の類型に関する研究. 社会心理学研究 7: 19-28.
- 寺山由美 (2007) 「表現運動を指導する際の困難さについて」—千葉県小学校教員の調査から—. 千葉大学教育学部研究紀要 55: 179-185.
- 中村恭子 (2009) 中学校ダンスの男女必修化の課題—中学校教員を対象とした調査にもとづいて—. 順天堂スポーツ健康科学研究 1.1: 27-39.
- 長谷川美恵子・酒井紀子 (1981) ダンス嫌いの要因の分析—自己概念との関連から—. 体育学研究 26.1: 1-10.
- 樋口匡貴 (2009) 恥: その多様な感情の発生から対処まで. 自己意識的感情の心理学 有光興記・菊池章夫編著 35-45.
- 森清・阿部正臣・梶原洋子・メ木一郎 (1981) 小学校助教諭の体力・技能と教科体育への意識 (第5報). —表現運動の指導の実態とその意識を中心として—. 文教大学教育学部紀要 15: 35-48.
- 渡辺敏明 (2009) 表現リズム遊びについて考える. 小学校体育ジャーナル 57: 5-8.

